魔界の二柱

国見炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔界の二柱

【Ｎコード】
Ｎ４５４０Ｚ

【作者名】
国見炯

【あらすじ】
赤字工場の事務員が魔界の女王に転生。金遣いの荒い魔王と喧嘩しながらも魔界で暮らす日々のお話しです。。※一話は本当に短いです（０は３５０文字程度。それ以外は１０００文字程）。

0

ウトウトとしながら乗っていたバスが、体験した事のない揺れ方をした。
一番前に座っていたのが良かったのか悪かったのか、バッチリと理由を目撃しながら目の前の鉄の棒に顔面を強打した。
ありえない。
これでも一応女よ。
絶対歯、欠けたよね。
何ソレ。
鼻も潰れた。

ありえないよね。

まだ結婚してないの？何て聞かれる年齢には達しているけど。
化粧なんて適当だけど。
女を捨ててるように思われているけど。

顔面強打を喜ぶ程女は捨ててない！

っつーか、何故バスの前に飛び出した。

自殺か。
世を儚んでか。

うちの会社の従業員を見習え！

この間なんか安売りのペンキを買ってきて自分たちで屋根を塗ったんだぞ！！

赤字工場ですがそれが何か？

赤字工場に倣って財布の中も真っ赤傾向にありますけど何？

あぁ、思考がおかしい。

身体が動かない。

目の前のチカチカが消える。

え……まさかこれで終わり？

今月の伝票処理、まだ終わってないんだけど。

1

パリン、と何かが割れる音が響いた。
不快な音じゃなくて、澄んだ音。

初めて聞くわー。何か癒される。
って少し顔面が痛い……ん？　顔面が痛い？？

「って私の顔面ッッ！！」

視界の確保はオッケー。包帯が巻かれてる形跡はない。
つまり私の顔面は無事という事だね。よしよし。

ん？

んん？？

何でか視線が痛い…。

え？

どうして見目麗しい人たちに囲まれてるの私？

両手で顔を押さえつけていたんだけど、指の隙間から見えるのは色とりどりな人たち。尻尾があったり羽があったり角があったりと、ありえないものが生えていたりするけど見目麗しいからまぁいっか。

鑑賞する分には何ら問題なし。

そう思っていたら、その中でも一際輝く人が一歩分足を前へと踏み出し、私を真っ直ぐに見つめてくる。

ある意味、熱視線、とかいうヤツ。

「女王様。お待ちしておりました」

優美に微笑み、片膝を付く男性。ちなみに、この人は蝙蝠のような羽が生えている。

「顔面――と申しておりましたが、女王様のお顔は我等魔族の中でも一際美しく、大変感服です」

声も美声なんだけど、その中で気になる所が一点。

あれ？

私が観賞用？

とは言っても、見るに耐えない程じゃないけど、こんな美形を目の前に観賞用になるかと言われると、おもいっきり首を横に振る。

そんな容姿。

けれど、そこまで考えて違和感が幾つか。

目線を視線に落とした先にある私の両手。いつも見ていた両手のはずなんだけど、生まれたての赤ちゃんのように白く、柔らかい肌。ほっそりとした、指先。桜貝のような桃色の爪。

わきゃわきゃとぐーぱーを繰り返してみる。

うん。私の思うとおりに動くわ。

はてさて。これはどういう事かしら。

そして三段腹とまではいかなくても、ランニングしなきゃヤバイかなー、なんて思っていた腹肉は引き締まってるし。

んー…どういう事だろう。ちょっと理解の範疇を超えてるかな。

「鏡貸してくれる？」

見た方が早いよね。

「どうぞ」

「ありがとう」

目の前の男性が、人差し指を宙へと突き出したら等身大の鏡が目の前に現れた。色々と疑問はあるものの、とりあえず横へと置いておく。

そして鏡を見てみたんだけど…。

「あらら。別人」

こういう時、悲鳴をあげて気絶出来る様な可愛い性格だったら良かったのに。

テンパってる癖に、無駄に冷静な私。勿論自覚あり。

「さて……詳しく説明してもらえる？」

ひょっとして、若かりし頃に読んでいたアレかな？とは思ってる自分がいるんだけどね。

どうせなら夢オチ希望だけど…。

あのバス事故を考えると、色々と複雑なものがあるよね。

2

ざっと説明を受けました。
大まかだけど。そこから分かった事といえば、赤字工場のしがない事務員だった私は、あのバスの事故で顔面強打。その際頭も強く打ち付けたらしく、ほぼ即死。ほぼ、ね。ほぼ。
あの顔面強打なんて体験は死んだ後も忘れられておりませんとも。
しかし、と改めて辺りに視線をさ迷わせてみれば、私が聞いた澄んだ音の残骸が私の周りに散らばっていた。
これはなんでしょう？
視線だけで蝙蝠の羽の人に問えば、にっこりと艶やかな笑みを返される。
「これは、女王様の卵です」
「へぇ、卵」
「えぇ、卵です」
「私って卵から生まれたの？」
「勿論です」
……勿論、だって。
軽くカルチャーショックを受けちゃったりしているんだけどどう

だろう。
　そんな私の疑問も蝙蝠の羽の人はさらりと流し。あれ、絶対気付いていると思うんだよね。気付いてて流してると思うんだよね。
　…いい性格してる。どこぞの社長みたいなヤツ。

「こちらは、元はこのぐらいの大きさの卵石でした。魔界においては一番価値があり、尊い鉱石でもあります」

「へぇ」

「銀色の卵石には、女王様が宿り生まれますから。我々にとっては何を置いても守るべきものなのですよ」

「ふぅん。銀色の卵石にはって事は、他の色もあるの？」

　銀色が女王の色なら、金色は魔王だったりしてね。魔界って言ってたし。

「勿論です。金色の卵石には魔王様が。こちらは３００年ほど前にお生まれになっておりますが」

「……３００年。それはまた長生きだね」

　生前の私の十倍程生きてるね。

「女王様はどうやら変わった知識をお持ちのようですね。私は５００歳ですが、十分の一も生きてはいませんよ」

「……へぇ～」

それはとっても長生きな種族だね。
そして、私の中身が生粋の魔界の住人じゃないという事も、理解ありですか。他の人たちが、私に対してひたすら頭を下げている中、蝙蝠の羽の人だけが私の前に立ち、悠然と微笑む。
うん。つまりはかなりの実力者。でもって頭もいいよね。性格は悪そうだけど。

「本来ならば、女王様は魔王様の対の存在。同時に生まれるはずが、魔王様の力が強く、対である女王様の誕生が遅くなってしまったのですよ」

「強いんだ」

「勿論。対である女王様の力も、魔王様と拮抗しておりますが」

そうなんだ。
魔王と拮抗って事は多分、魔界じゃ一番って事だよね。
でも魔王って…。

「人間と仲が悪かったりしてるの？　勇者に退治されたりしない？」

私自身がある意味ありがちな体験をしているという事は、勇者に退治されるまでが一連の流れ、という事もありえるんだよね。
そう思って聞いてみれば、思いっきり笑われた。
顔……崩れ過ぎじゃない？
けど、大口を開けても美形はやっぱ美形。
例えお腹を押さえるようにしつつ身を捩じらせても、角度を変えても美形は美形なのよ。

「魔王様は既に6回程人間界を壊滅状態に追い込み、　勇者と名乗

る人間は両手じゃ足りない程塵に返してますよ」

「……何で３００年で６回も？　多くない？？」

そんなに回数が多かったら立ち直れないね。そう思って聞いてみたんだけど、返ってきた返答は予想の斜め上をいくものだった。

「資金不足だからでしょうね」

「…資金不足？」

「はい。魔王様は集める事が好きですから。天界への襲撃もあわせたら、両手では足りない数ですよ」

「……はい？」

今、色々と変な事を聞いたような気がする。

「攻め込むと、お金になりますから」

私の引き攣った頬を眺めながら、蝙蝠の羽の人が言い切る。

いや、だからね。

資金調達で攻め込むって……。

「リスト頂戴」

「はい？」

「魔王が買った購入品リストを用意してくれ、と言ったのよ」

節約もなしに、他所から分捕ったのか魔王というヤツは……赤字工場の事務員経験者としては、本当に見過ごせない。
寧ろ、リスト次第じゃ殴り込みに行くからね。
実力は拮抗してるって言ってたし、殺されはしないでしょ。多分ね。

3

案外リストはあっさりと渡された。元々手元にあったのか、それとも単に魔王の側近が頭を悩ませていただけなのか。
よくわからないけど、そんな事はどうでもいい。
気合を入れて腕まくりをしつつ、インク式のペンと紙を用意してもらう。勿論赤色のインクも用意済み。この紙は複製だっていうから、遠慮なく書き込めるね。
そう思ってリストの上からざっくりと見てみようと思ったんだけど、一行目から視線が釘付けになる。

何、これ？

いやいやちょっと待って。

「……これって」

羽ペンの先でクイッと一行目を指差す。ちなみに、あの蝙蝠の羽の偉そうな人は実際魔族の中じゃ偉いらしく、強制的に私の側近になった。名前はアスターニェとかいうらしい。
長いなぁ、と思うけど、私の身体に刻まれた名前の方が長いから何も言わないでおく。
人間、触れない方が良い事もあるって事で。

「それがどうかしましたか？」

「購入したの、先月なんだ」

「そうですね」

「魔族が、何に使うの？」

「さぁ。肩こりという人間が悩むものには無縁ですから。魔王様に聞いて下さい」

にこっと相変わらず無駄に色気を放つ艶やかな笑みで言い切る。しかし何でだろう。自分の中で脱観賞用容姿を果たしたアスターニェを見ていると、まったく心が揺れ動かないんだけど。

気分は触るな危険という感じ。

第一の側近だから毎日会うみたいだけどね。

「無縁なんだ。肩こり体質だったから嬉しい…じゃなくて、じゃ、次」

一行目はマッサージ機。異世界購入。

二行目はぶらさがり健康機。やっぱり異世界購入。

「ですから、魔族には無縁の…」

「もぅいい。次」

「女王様。人の話しは最後まで聞くべきですよ。でないと…」

「でないと何？」

「泣いてしまいますよ？」

小首をちょっと傾げて、輝かしい笑顔で言い切られた。

……非常に腹がたつのはなんでだろう。

「泣け。喚け。そして庭掃除でもしてろ」

思わず感情のままに、背景におどろおどろとしたものを背負ったまま言い切る。すると、アスターニェは一瞬だけ驚いたような表情を浮かべたけど、次の瞬間には愉悦を交えた表情へと変わる。

その変化は何だ？

まったく良い気はしないんだけど何でだろうねー。

「やれやれ。此度の女王様は口が悪い。塞いでしまいますよ…？」

愉しげに。本当に心底愉しげに顎をクイッと人差し指で持ち上げられ、ものすごくアスターニェの顔が近くなる。

「……庭のカエルとでもしてなさい」

数時間前まではうっとりするような観賞用美形だったのに…。

今は背筋に悪寒が駆け抜けるような対象になってしまったような。ちょっと勿体無い気もするけど、要因……敗因？はアスターニェの性格だろう。絶対。

「あぁ、本当に女王様は楽しい程口が悪い」

「それよりも、三行目のお取り寄せグルメって何？　魔族の食事は人と一緒？」

というか、異世界が好きね。本当に。

「つれないですねぇ。まぁ、今回はいいでしょう。
その件については種族ごと、でしょうか。人の食事も食べれなくはないですよ。好みさえ合えば。ただ魔王様、女王様については鉱石から発せられる魔力が一番の食事だという話しは聞いた事がありますが」

「へぇ…」

「保管する呪があるから、女王様が心配するような腐らせる――という事はありませんよ？」

「まぁ、腐らせるのも心配だったんだけどね。数が多いから」

尋常じゃなく。寧ろ買い物中毒患者だろう。魔王様というヤツは。

「側近に配ったんじゃないですか？」

「お歳暮か……そんな気遣いをするタイプ？」

それだったら、まだわからなくもない。と思っておこう。うん。私の心の平和の為に。そしたらちゃんとアスターニェが答えてくれましたとも。
満面の笑みで、心底嬉しそうに。

「いいえ。今の魔王様がそんな気遣いが出来るような方なら、天地がひっくり返っておりますよ」

「……へぇ」

その素敵笑顔。
無性にはりせんでぶん殴りたい。
美形なのになー。何でだろうねー。アスターニェだからかなー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4540z/

魔界の二柱

2011年12月17日01時06分発行